シリーズ 第37回

湖上にうかぶ山城

奥津湖に浮かぶ浮島は、苫田ダムが完成する前は、吉井川左岸に位置する独立丘陵でした。

川の流れが大きく屈曲する所に、張り出すように存在するこの丘陵は、南北朝時代（十四世紀）の山城が築かれていました。

「城峪城」とよばれているこの城の名は、現在の地名からとって近年名付けられた名称で、『作陽誌』（元禄四年〈一六九一〉刊）でも、「故墨」（古いとりで）とのみ記され、「何人の住むやを知らず」と解説されており、江戸時代には城跡であるという認識はあったようですが、すでに名前や由緒についてはわからなかったようです。

現在の城峪城跡（東から撮影）

「城」といえば岡山城や津山城のように、高い石垣と白壁や瓦で飾られた櫓や天守のあるものをイメージするかもしれませんが、織田信長が勢力を広げる安土桃山時代以前の城といえば、戦など敵対勢力の侵攻時に一時的に立て籠もるとりでで、地域の土豪が周辺の村を守るために、見晴らしの良い山頂や、交通の要衝などに簡単な防御施設や建物を造って、普段は見張りなど少人数が駐在する程度のものでした。

城峪城跡は苫田ダム建設に伴い、平成八・九年に城跡全体の発掘調査が実施され、その全貌が明らかになりました。

城峪城のある丘陵は、U字形のような地形を呈しており、大規模な地形改変を行わず、元の地形を生かしつつ築城されていました。丘陵の最高部にあたる広い平坦面が、城の中心的な位置となる曲輪であろうと思われ、この曲輪を囲むように、小規模な曲輪や、防御と城兵の通路を兼ねた「土塁」や「切岸」「竪堀」などの人工的な設備があります。そして、他の尾根や丘陵の先端部から分断するように、「堀切」という断面がV字形の溝を二重に二ヶ所配置し、厳重に防御されていたことがわかります。

発掘調査時（南上空から撮影）
（撮影：岡山県古代吉備文化財センター）

出土遺物は多くはありませんでしたが、皿や坏、すり鉢、水甕、刀子などの日用雑器や、輸入品である青磁・白磁の破片、硯や槍などの柄に装着する石突という鉄製品も見つかっており、生活用品から支配者層の所有物、文具・武具など、城としての最低限の装備は調えられていたことがうかがわれます。また、釘も多く出土しており、見張り台や指揮所・宿所などの建物があったものと思われます。

城峪城は、防御施設の配置からみて、南の吉井川下流域からの侵攻に備えてつくられたと推測できます。この城の北側には、広い河岸段丘の平地が広がり、武士の居館跡も見つかっており（久田堀ノ内遺跡）、中世の文書にでてくる「久田庄」の中心地の可能性が指摘されています。このことから、城峪城は久田庄をおさめる土豪が、南部から侵攻する敵の久田平野への侵入を防ぐために造られたとりでであると考えられるのではないでしょうか。

出土遺物
（上段：左から皿・坏）
（下段：左から石突・刀子・硯）

城峪城跡は、現在は遊歩道が整備され、見学しやすくなっています。曲輪や切岸・堀切などの遺構も見ることができますので、是非「浮島」ではなく、史跡「城峪城跡」としてご覧になってみて下さい。

参考資料：『城峪城跡発掘調査報告書』・『美作国の山城』・『作陽誌』

生涯学習課　日下
電話（0868）54-7733

2013年6月号　第100号　毎月1日発行
〒708-0392 岡山県苫田郡鏡野町竹田660 鏡野町くらし安全課 TEL0868-54-2780
【鏡野町のホームページアドレス】http://www.town.kagamino.lg.jp/